

歴史の中の青春

1940年代、国境をものともせず
モンゴル・チベット・インドを駆け回った日本人がいた。
その名は木村肥佐生。異民族の中で生きぬいた
青春の記録である本書は、歴史に関わって生きることの
醍醐味を伝えてくれる。

大川謙作

おおかわ けんさく / 東京大学大学院総合文化研究科学術研究員



木村肥佐生 著
(スコット・ベリイ編)
三浦順子 訳

『チベット偽装の十年』

(中央公論社、1994年。原書は1990年にセリンディア社より出版)

西域放浪の夢

何度も読み返し、またその度に新しい発見がある本というものがあ
る。私にとって、本書は、まさにそ
ういう数少ない本の一つである。チ
ベットに関心を持つようになって以
来、この本の主人公の木村肥佐生は
私のヒーローであった。

木村は、戦前日本が植民地政策
のために設置した人材養成機関であ
る興亜義塾で教育を受けた人物で
ある。木村は自らの希望で、蔣介石
軍に対する援助ルートであった西北
ルートの実態調査という名目のもと、
モンゴル人巡礼僧に扮して西域に潜
行した。結局西北ルート調査が困難
であると判断した木村は、軍部との
連絡を絶ったまま独断でチベット入
りを決意する。チベットで日本の敗
戦を知った木村はそのままインドに
渡り、今度は英国情報部のスパイと
しての活動も行いつつ、卓越した語
学力と観察眼を武器にヒマラヤを往
還し、モンゴル人有識者としてチベ
ットの都ラサの貴族たちの社交界に
入りこみ、またチベット人革命家と

も交友を結んで明治維新の経験を伝
え、チベット政府に改革を要望する
上申書を提出するなど、チベットの
近代化を目指す活動も行っていた。
本書はこのような木村の経験を伝え
るきわめて魅力的な記録であり、チ
ベット現代史の生きた教科書である
といえる。

木村のこの経験は処女作『チベ
ット潜行十年』によって早くから知ら
れるところとなっていたが、その旧著
は、正直それほど読みやすいものでは
なかった。講演速記録ということも
あったし、発表時の1958年におい
てチベットが大きな政治的混乱の中
にあったため、日本人スパイとの交
友が知られてしまうと、チベットの友
人たちに迷惑がかかるという配慮が
あったことも関係しているのだろう。
対してこの『チベット偽装の十年』は、
米国人作家スコット・ベリイが木村
へのインタビューなども交えつつ新
たに編纂したもので、旧著に比べて
はるかに読みやすく、また率直で興
味深い読み物に仕上がっている。

歴史との関わりの中で生きる

実は、同じく興亜義塾出身でモン
ゴル人に偽装して木村と同時期にチ
ベットを放浪し、『秘境西域八年の潜
行』を書いた西川一三に比べてとき
、かつて我が国のチベット・ファンの間
で木村の人気は低かったとも言える。
確かに豪放磊落な熱血漢であった西
川のほうが旅行者としての豪快さで
まさっており、その旅行記もまた抜群
に面白い。常に底辺の民衆たちと共
にであった西川に比べてみると、二重
スパイとして生きた木村に悪い意味
での「要領のよさ」を感じるという人
も多かった。だが木村と同じ青春の
一時期をラサで過ごし、チベット現代
史の知識が深まるにつれ、私には木
村の行動の意味がより深く体感され
るようになっていったと思う。私はそ
こに、歴史の傍観者であるよりは、歴
史との関わりの中で生きることを選ん
だ一つの青春の姿を見たのである。

木村のチベットとの関わりはある意
味では偶然の産物である。木村には
軍部に協力するという意識は希薄で

あり、むしろ調査を口実として冒険に
憧れる青年が西域放浪の夢を果たし
たと言った方が実情に近く、日本のス
パイとしては大した貢献もできなかった。
それでも、今日の視点からして、
彼を植民地主義の先兵として批判す
るのは簡単なことかもしれない。だが、
木村はむしろ、モンゴルに詳しくなれ
ばなるほど日本の植民地主義に対して
批判的になっていくというジレンマの
中にあり、当時の日本人がそのような
批判的なまなざしを保持していたとい
うことは例外的な事例なのである。

チベットとの偶然の出会いの中で木
村は歴史の現実と関わり、チベット滞
在中も、帰国後も、彼にできるかたち
でチベットを助けるための努力を続け
た。チベットとの縁を断った西川にせ
よ、関わり続けることを選んだ木村に
せよ、それは、異民族と関わり、歴史
の中の青春を生きた彼らなりの責任の
とりかたであったのである。